

2015.
10

なんた
たる
星

迂回

米田 一央

はだし

ナイス害

加賀田 優子

恋をしている

伊舎堂 仁

スコラブ



【目次】

連作

「なんこつ」・・・・・・・・はだし

「母の幅」・・・・・・・・ナイス害

「喜田市のエイ」・・・・・・・・迂回

「構成」・・・・・・・・恋をしている

「デジタル・ラブ（とか言っちゃう夜だ）」・・・・・・・・スコラブ

「冷凍と睡眠」・・・・・・・・加賀田優子

「蛾ぎみ」・・・・・・・・米田一央

「シナモンじやりじやりパン」・・・・・・・・伊舎堂仁

歌十夜

編集後記

足は取り除きましようの横にあるカラーイラストが海老でよかった

だれもない交番がある世の中の知らないことがやっぱりとおい

炊きたてのごはんの奥に炊きたてのごはんがみえる なかなか続く

なんこつの唐揚げデビューした夜に捨てそこなつた童貞がある

そんなとき あばよ は、ふつと来て深夜の通販に置いてかれてしまう

入つてく犬がもつかいこつち向くちよつと参考にさせてください

きょうまでのテレビのために溢れ出た肉汁たちへちいさな墓を

ハッピーニューイヤールと言ってそんな気になつてくる缶ビールの音も

何帰りなのかわかんない4〜5人いれば出来るよなたのしい何か

自転車のうしろへ乗せた人もいま段差で浮きあがる尻をうつ

母の幅 ナイス害

ティッシュ箱みつもよつつも側に置きずつと減らない天才現る
使用済みオムツを洗濯してしまい細かいゼリーキラキラキレイ
太つちよの服しなくて寂しくない 猫が潜れるスペースできた
両の手で一本の杖つきながら歩く風の谷の人かよ
ポータブルトイレの蓋が複雑で悪魔を閉じ込めるような仕組み
父の嘘かき消すような母の嘘どちらも信じられぬ苦しさ
開かないと車のドアをガチャつかす心の鍵も開いているのに
新婚さんいらつしゃい見て泣きそうな母の顔見て父が泣いてる
俺を産んだ人を産んだ人を産んだ人が風に揺らんでいます

ねえ足がじんわり熱い

中腰ですつと金魚みてるからだよ

やっぺ目えはいつたエゴマ油エゴマ油

見上げれば黄色い雨とエイの顔

かかとからひび割れていくタイプなの

ぬるい麦茶と柔軟をしろ

稲刈るの楽しそうじゃない？

男が選ぶ少女コミック程度にはたぶん

割れ方つて人それぞれでそれがもう無責任じゃないのかと

おやすみ

霊園に万国旗揺れ

いつだっけ雲を吸い込む街じみたサイズのエイが現れたのは

くるまったスズメはくるまる前に死んでた

あめちゃんを噛むのがへただ

噛んでたら滅んだ村もあったと思う

あの尻尾の空側には毒針があるんだって

(ふうんて言おうかな)ふうん

図書館の木漏れ日なんかなまぐさくない？

テキストが影で見にくい

DNAみたいな雪が降ってきて

触れちゃいけない

ふれちゃいけない

構成 恋をしている

元貴乃花親方の花の名を聞いてなかった 予想：パンジー

牛井に銃が入っている（これは！殺牛思念アルバムですか！？）

「順天堂大学のプール設備」を思う時着るカーディガンだよ

友だちとテレビの相撲取りの名に点数をつけながらこころは

「牛井屋に行く〜〜〜」と書き残し西松屋のトイレで用を足す

羽織つたらかわいい君の声がかすれて僕に届く アルバム

西日から出れば大学 こんなこと君にも言えないけれどいいんだ

なんにもない今が好きでそのことを言ったら花の揺れる幻聴

牛井の終わりに西日がさしかかり こんな花言葉はどうだろう

公園のトイレに捨てたテレビからかわいい君の声がかす

横にした自転車の車輪の回転が止まるまでまばたきをしなかった

音のない拍手の途中でのなかにとびこんできた虫が潰れる

くじびきで決まるよりかは美しいグーのみでするじゃんけんぽんへ

雪原にて投げあうレモン あたたかいことにずいぶん飽きてしまった

旅をするための鞆に詰められて旅のかたちを覚えるねんど

オオカミのいない森にはオオカミのかわりのものを放しておいた

窓の開く音はしないがそれはもう窓がないからなのだと思う

羊水を飲む健康法 羊水の味に調節されてゆく水

長くした紐でつくった暗がりには手をひらけば止まらない虫のこえ

おおきな肉塊の自然解凍がはじまり頬杖をついて肉までを待つ

明日からはヌートリアとしてくらしたい雑草を贅としてくらしたい

ビタミン剤の上でからから舞う蝶が蓋に手首をのせる瞬間

台所洗つてみたらカステラがのけぞつて懼しずんでいくね

午前二時三十分のアラームが「平気！平気！平気！」バツタじゃんもう

のうみその梓線どうしが恋をして成立させる輪投げの値段

コンビニで8000円の確認をしているうちに蛾が転生す

親指が硫黄のように炸裂し階段部分からの発煙

飛べるってカラオケで言うキャバ嬢が最も飛んでいる空間で

パーフェクトモザイク同級生のいつ？ いつがあなたと類似している？

巻尺に温度のあればゆらゆらの部屋もきつかり生きているらし

高原と谷と林と楠が上司にいればすすしいだろう

ぼくとだけ仲良くしない体育の実習生の名前 けんゆう

けばくなるまではじんわり好きだった女子のポメラニアンの名 ここあ

マチダアイさんとせえの、で言いましたスリジャヤワルタナプラコツテって

憎いのはおしりの大きな警察とおしりの小さな中牧正太

久保田 土居 土屋 金井と合コンだ インターハイの相手みたいだ

加藤さん 加藤さん 魔王がくるよ」「加藤さんは呼んだって来やしないよ」「

ハッピーバースデイディア・おじいちゃんって英語で歌い、名前でもない

「ひとしつて イシヤドウヒトシウ？」そうだけどそんな凶鑑の虫みたいにさ

戦争はやめてヘラルド奈良店でシナモンじゃりじゃりパン食べようよ

歌十夜



第一夜

こんな短歌を見た

君がもう眼鏡いらなくなるようにいつか何かにおれはなります(雪舟えま)

私は世界で一番平和な人である。全てが平等であって欲しいし、戦争はもちろん、ネコの喧嘩も許さない。

誰が決めた「一番」なの？そんなものは知らない。私が一番だと思うから一番なのだ。

ある日、タコの代表がこう言った。「タコの足は8本で、イカの足は10本やんか。もう比較されるのがしんどいねん」

なるほど。

私はイカを全員集めてこう言った。

「君たちの足を1本ずつタコにあげて欲しい」

イカの代表は「構わんよ」と言い、胸を張った。

イカは皆、自らの足を1本ちぎり、私にくれた。

タコ達にそれを届けると、各々好きな場所に足をくっつけた。

頭にくっつけてブルンブルン回しているやつもいる。よほど嬉しいらしい。

良かった。これで、タコとイカの足は9本ずつになった。

平和だなあ。平和は退屈である。

それを承知で私は世界で一番平和なのだ。

ある日、私は恋人と喧嘩をしていた。

恋人が死にたいと言っている。私はそれを止めようと、スケボーから降りて恋人の目を見つめる。

真夏のように生きた恋人に、私はこう提案した。

「君の足を1本、私にあげたらどうだろう？」

気が狂ってる。

そう恋人が言うと、見たことのない靴を履いて、部屋をツカツカ出て行ってしまった。

怒ったの？

平和だなあ。平和は退屈である。

私は幼少の頃に事故で両足を失った。そしてこの平和を手に入れた。

インストバンドの唄で、笑いながら私は一晩中踊った。

第二夜

こんな短歌をみた。

孔雀にはない人権をもっており毎夜指紋まみれにしておる／忠野昌

顔をあげると弟は老人だった。

それなのにまだ結婚の話が続けていて、ゆるしてくれ、ゆるしてくれ、と頭をこすりつける。

私のゆるしなんかいらないだろう。

ほんとうに結婚をしたいのならば、すればいいのだ。

そもそも、誰にことわる必要もないことだ。

結婚をすればいいのだ。

そう返すのも、いいかげんに億劫だと思った。

それにもう、弟は老人なのだ。

いいよ、と私は言った。

ゆるす、と私は言った。

弟は返事もせず泣いた。

それはしばらく続いた。

私が歌に戻ろうとした時、やっと弟は泣き止んで、豆腐を買いに行こうと言った。

いいよ、と私は立ち上がった。

角の豆腐屋に行くのは妹の結婚以来だった。

弟の歩みは遅かった。

何も言わなかったが、弟の身体はあちこち傷んでいるようだった。

私は数歩進んでは弟を待ち、影を踏まれないようにまた進み、待ち、を、繰り返した。

豆腐屋の親父さんは錆になっていた。

私の一步前に出ると、弟は親父さんに深々と頭を下げた。

その一步うしろで、私も同じように下げた。

奥の水槽はほとんど赤くなっていた。

近づけば水は澄んでいて、無数の豆腐が沈んでいた。

どれがいいの、と聞いた。

弟が指さしたのは真ん中のほうのひとつだった。

私は身を乗り出して掬わねばならず、腹のあたりが濡れた。

両手を椀の形にして、生ぬるい豆腐を掬った。

水から出た豆腐は、ゆっくりと皮膚になった。

そうして体温を持ち、水につけていた私の手よりすこし温かくなった。

熱が手首までしみてきて、弟に渡すのが惜しくなった。

しかし、ありがとう、と弟が言った。

また、弟は、曲がり、皺々になった両手をなんとか広げ、ぎこちなく椀の形にした。

私はそこに豆腐を滑りこませた。

皮膚になった豆腐は、欠けることもなく、弟の手におさまった。

ふたりでその豆腐を眺めた。

弟の手にも、今、熱がしみはじめたと思った。

私は弟の顔を覗き込んだ。

しかし、弟はもう泣かなかった。

第三夜

こんな短歌を見た。

やがてこの部屋であなたはひらかれる 成層圏のまぶたのように (笹井宏之)

短歌を見たとは言うけど、僕にとってそれはペタンクのルールを見たとか土のスープのレシピを見たとかと同じ風に、少し特殊な文字列を見たらしいという事実しか表していない。
短歌は、あるいは詩は、殆どの人間たちから取り残されたから。
情報その他もろもろの技術の潮に乗って急激に進化・変化した言葉から置き去りにされた文字列たち。
絶滅した動物の標本みたいに、研究所で大事に大事に保存されているものの一種。それがたまたま目の前にあった。

「は一、触りたかったな、紙。紙に保存されてるテキストって初めて見たよ」

博物館の帰り道に、独り言のように言われる。

「ろくにバックアップも取れない物体に保存するとかぞわっとするけどな。おまえみたいなのに触られて消えちゃったらどうすんだろ」

「いいじゃんテキストに触れるなんて。最高。あの短歌もよかったなあ。あの短歌に触りたいなあ」
大昔の施設の跡地から見つかった貴重な紙資源の展示、というのが博物館の展示企画のテーマで、そこに書かれている内容は「当時の文学」としか説明されていなかった。これ短歌じゃないかなきっとそうだよ、と隣で騒ぎ立てられて、僕は短歌を見たと自覚するに至った。

「そもそも触ってどうなるんだ。テキストなんだから読めればいいんだろ」

「は一んゲンダイ人の権化みたいなセリフだねえ。短歌には手触りってもんがあるのさ。そこにあった短歌にもね。もしかしたら本当にそれに触れられるかも、って思っちゃうのさ」

「言ってるよ古典オタクめ」

普段より橙の濃い日暮れを見ながら帰った。

あいつは「ちょっとあざとい」と言った。

僕は「夕方だな」と思った。

短歌ブームが来ている。極めて局所的だが。

日に数度、博物館で見たような意味のとれない文章のあとに、景色とか動物とか道でふやけたティッシュとかの写真が続けてメッセージとして届く。

【写真は、きみのための補助線だ (カレー)】

なぜカレーの絵文字を入れたのかわからない。

ついにはオリジナルの短歌まで送りつけてくるようになる。

【丸くなるルールに沿ってはりがねはアスパラガスをつらぬく濡れる】

この前撮られた、日暮れと僕の写真が続く。

死語になりかけの冗長な語彙を必死に使って、解説までしてくる。

それがあっても相変わらず意味は判らない。

なんとなく雪だるまの絵文字をそれだけ返したら、【あざといけどよし!】とのことだった。

「笹井さんの短歌がくずれちゃったんだって」

と不意に言われた。何のことかと聞けば、この間の博物館の紙のこと。紙は物質で、風化する。展示中であっても、管理が行き届いていようとも。振動で、空気の揺れで、長い年月を経た脆い物体は、その限界を超えればさらさらと消える。忘れがちだが当たり前のことだ。

とは言えあれだけ執心していたのだし、向こうにしたって展示中に用をなさなくなるようなものを置い

ていたというのも無責任な話だ。愚痴ぐらいは聞いてやろうか。

「あの歌は消えちゃうような気がしてたんだ」

構えた姿勢から力が抜ける。何を言い出すんだ、真面目な顔で。真面目で嬉しそうで悲しそうな顔で。

「触りたいって言ったけど、触れないくらいの手触りの歌だったんだ。届かなさ、まで手に入れた歌だったんだ。あの歌はあるべき場所に書かれていた。メッセージでもサーバでもパピルスでもなく、ちょうどいま崩れてしまう紙の上に書かれていて、わたし達はそれを見られたんだ」

よかった。でも触りたかった。そう言って静かに泣きだした。

「……………こないだのおまえの短歌は」

言葉を選ぶ。結構久しぶりの感覚だ。

「俺とおまえがいなくなったら、くずれるのかな」

「……………その前にきみが忘れなければ、そうだね」

それは、どんな表情なんだ。

頻度は減ったが短歌は引き続き届けられている。

紙の代わりにのつもりか、短歌を書きつけたボロ布の写真が、という場合もある。

【手のひらのはんぶんほどを貝にしてあなたの胸へあてる。潮騒（笹井宏之）】

続けて、

【すごい、手触りがすごい！！（短歌を撫でまくりながら）】

とのことだ。

ボロ布に書いた短歌、の写真、が保存された僕のデバイスについて、こいつはどう思うんだろう。”そこ”にぴったりな短歌は多分まだ見たことがない。

第四夜

こんな短歌を見た

歯がかちかち椅子の0℃は焔だし、わたしは尺八の電解質だし（8/31）

サッ ポロポテトが噴水らしくて見に行った。バーベキューごときが、って気持ちになってきて離れてみ
ていた。ほろほろと崩れて、後（ご）のサントアンヌ号みたいだった。姉は首がボキボキ鳴る菊みた
いで、サイのキーホルダー捨てたり、歯をならしたり、踏み切りをなめたりして大変だった。気ん持ち
悪い。牛肉が食べたい。

祖母が麻酔を使ったらそいつは豚みたいで、簡単だった。帰りの特急は本当に無で、犬がいないよう
な風景、あと焔、屋根ですわる大工、馬の交尾。お皿かよって思った。わんぱくの足に椎茸が生えてい
たのはちょっとウケたけど。

家に帰ると祖父の趣味がまた変わっていた。今日だけで7億回、だけど黙ってた。そういうの嫌いじゃ
ない。二億回めの尺八、でも姉が起きてしまった。カサブランカを歌い、地球が少しゆれて、大学が2
つうまれた。きっと、すぐなくなると思う。母が刀を振り回している、父はダイハツで突っ込む。わた
しは姉のまえに立った、らしい。

二時間にも及んだみたいだから省くけど、右腕はなくなるし靴なくすしで大変だった。終わって、ふり
むくと祖父はギターをかき鳴らしていた。ばかやろ、となつて空に、夏のラストの夕暮れ。きれいだ
った。なんかどっと疲れがきて、座っているとゆっくりと近づいてくる影がひとつ。横にすわり、びい
だまをなめて、なにかをポケットからとりだす。まったくもって姉だった。にこにこしていた。そうし
てわたしに一枚の紙きれを手渡すと、噴射で空へと消えていった。そっか、お散空（くう）の時間だも
んね。夕暮れにひとつ影がふえて、それは正直ジャマだったけれど

おたんじょび、めでとね。

今日を忘れないでおこう、とおもった。

第五夜

こんな短歌を見た

公園のトイレに捨てたテレビから可愛い君の声が歌が

新宿のどこかにテレビを置いてきた。どこに置いてきたのかを忘れてしまったが、とにかく私はテレビをあの日の新宿の夜のどこかに置いてきた。月が確か出ていた。私はひどく酔っていて、居酒屋の裏手に並んでいる三つのポリバケツに向かって「人類愛」「鷺宮駅」「ガードレール墓場0年」という名前をそれぞれつけ、会社の上司および同僚のほとんどから壊れた目覚まし時計だと思われていた。ちょっとだけ可愛く優しくてもめっちゃめっちゃに迫るほど好きではないが、つまりちょっとはいやらしい情を抱いている竹園さんが私を助け起こして「大丈夫？」と言ってくれた。「大丈夫です、鷺宮駅と人生の長い各駅停車について話しているところです」という何故か設定にやたら忠実な寝言を私も記憶しているくらいハッキリと口にして、そのまま夜の新宿を猛ダッシュで駆け抜けた。

新宿は臭すぎてハイウェイを走るトラックの荷台に丸ごと新宿を乗せちぎれんばかりのスピード出して臭さをひっぺがしてやりたいほどだったが、走っているのは私、月明かり、最高。とにかく行けるところまで走ろうと思っていたのを覚えている。車のランプとカップルのどちらも等価で光って、私の肺がその光であふれるイメージ、イメージ、イメージは続くよどこまでも、走り疲れた。もとい、体力無しの花咲く感じの私はさっきのどこまでも良くアルプスへ向かう列車のような気持がどこへ行ったのかへちまなのか、もうとにかくダメでダメダメでやがてぼて、ぼて、と臭い橋のなかほどまで数歩あるいてそこからは静止、よく分からないが破顔。そして最終的には全てがよく分からなくなってしまって橋の名前が書いてある部分をガンガンに殴っていた。橋の名前は全く覚えていないがとにかく殴る。殴ること殴る人のごとし。ここはどこだストリートミュージシャンはどこだ。ド下手な歌が訊きたい。「小雨の日の大工の靴」みたいな歌声と「ダチョウを壺に閉じ込めて5年寝かせたことで壺から聞こえるようになった音」といった風情のギターをかき鳴らして私に安心を、尿意を、そう安心は尿意、尿意は私の唯一の尊厳。私ができる数少ない事柄が月光に照らされて、とても聖戦めいていたのでとても恍惚、つまりは放尿である。

正当化された、した、放尿を橋の上から行って私はそこから記憶を失う。本当にそこで失ってよかった。

目覚めると私はオフィスにいた。いつもの仕事場。私の職場はしょっちゅう他の会社の人間が入り出して、しかも私のデスクの目の前が通路になっているので否が応にも来客者が目に入る。

「さっき通った人長くなかったですか？」

隣の席の三園さんが私に小声で話しかけてきた。竹園さんよりやや可愛くないが、しかし不細工というわけではなくしかも「旅客機を今まで一度も正しく言えたことがないんです」と酔っぱらった時に話してくれたのでちょっと好きだ。

「長かったって何が？」

「目、つぶってましたよね」

「目？」

「そう、アイですよ、アイ」

アイと言われてちょっとドキリとする。つくづく元卓球部員臭さが出る。

「さっきの白髪の、おじさん？全然気づかなかった」

「つぶってましたよ。しかもそのつぶってる時間が、長かった」

「長かったのか」

「そうです。こう、誰しも目をつぶる瞬間ってあるじゃないですか。まあ、歩きながら一瞬つぶるっていうのもなくはないですよ。でもそれってせいぜい一秒とかそのぐらいじゃないですか。でも、あのおじさん、5秒くらいはつぶってましたよ、歩きながら」

「あぶないな」

「でも不思議とそんな感じはしなかったんですね。なんかこう、自然っていうか、行くべきところへ行くだけって感じでした」

ふーんと私は思っただけでなく、声に出してその後会話は続かなかった。私は目を長くつぶって歩くおじさんにもう興味がなく、仕事をしながらたまに大げさにため息をついたりなんかして、いつまでも三園さんに「旅客機って言ってみて」と振るタイミングを考えていた。

プワーンという速馬機械の音で目を覚ました。

私は公園の公衆便所で捨てられたテレビを枕にして横たわりっ子ちゃんだった。歌が聞こえた。

『富士山は憲法を知らな〜い冷凍の免許証を返さな〜い世紀末はあんただけのものよって誰もが言ったりした〜いあたしは怪獣にナンプレを教えたかった……』

テレビが歌っていた。テレビには存在しない架空の私の恋人が映っていてただ私だけの為に存在しない架空の歌を歌ってくれた。それはどんなに支離滅裂な歌詞でも私はそれが「私の為の恋人」だということが何となく分かった。三園さんでも竹園さんでもないけれど、この人の事はかなり好きだ。目をつぶる。

『半蔵門線で怪談をしな〜い』

1、2、

「あのおじさん、5秒くらい……」

3、4、

『連続ロッカーを普通じゃな〜い』

「わたし旅客機が……」

『強盗の炊飯器は常に金でみたされてるよ見てみよう…根こそぎの向日葵じゃな〜い』

「大丈夫？」

『私は、私は、

5

私はあなたの恋人

恋人を置いて私は帰路についた。新宿を「ジュークシン」と言うトレンドイエングルのマネージャーのブログに荒らしコメントをいっぱい書いて寝た。

【編集後記】

買い物が難しい。

最近欲しい物リスト：外で書き物ができる用のパソコン、おしゃれな服、革靴、本棚、誰もが認める時計、自己満足が強いコレクション(何でも可)、スマホのカバー、スマホ自体(買替え)etc

最近欲しい物リストで実際に買いに行こうと思ったものはあるけれど、僕はその店に入った瞬間胸がドキドキ呼吸が苦しくなってすぐ出てしまう。

僕は人に自分が「何かを欲している」と思われるのが怖いのだと思う。人の意図が気持ち悪くて自分の意図もだから人一倍気持ちが悪くなってしまう僕は、買い物をするのが難しい。友達と買い物に行くなんてもっての外で、その友人に僕が「何かを欲している」ところを見られてしまうのが恐ろしすぎてとても声が亡くなる。

何かを買いたくて池袋に行って6時間くらい歩いたのち何も買わずに帰る電車の中で、僕がずっと聞いていた音楽の名前を思い出そうとしています。

なんだっけな。

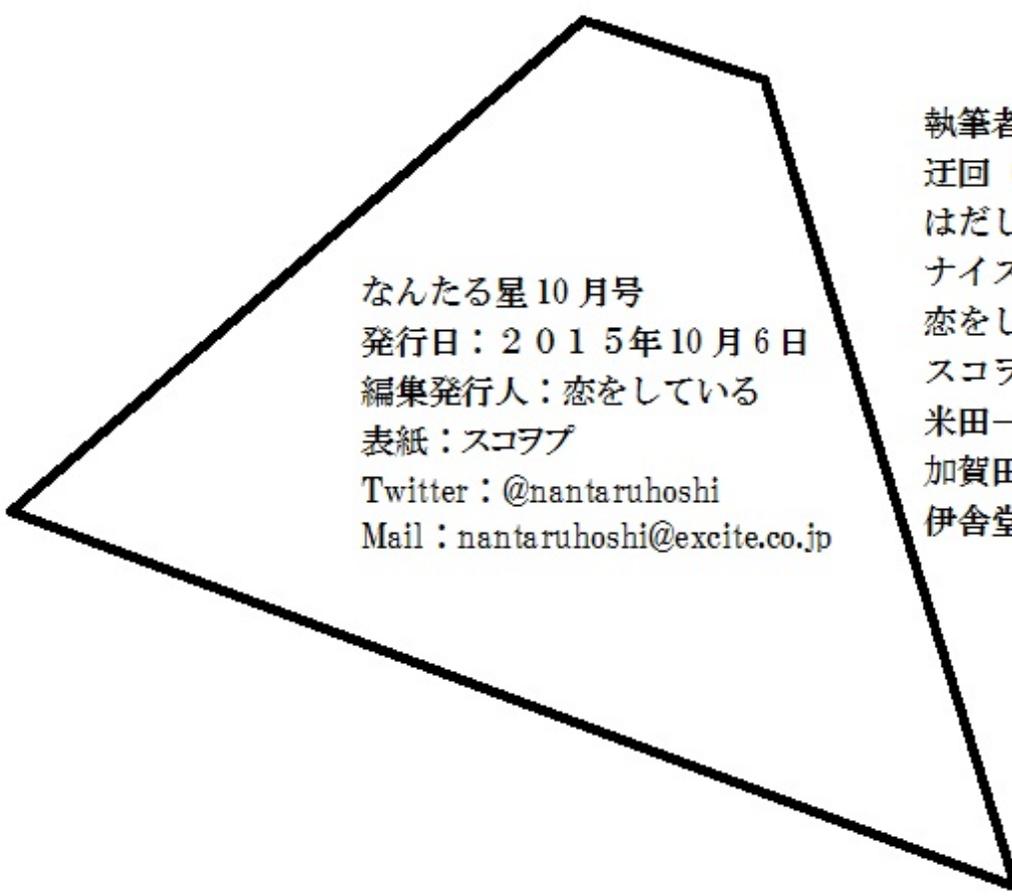
あ

あれだ

「年貢 for you」

2015 10/6 恋をしている

Mackerel, mackerel and the one why were you in mackerel?



なんたる星 10 月号
発行日：2015年10月6日
編集発行人：恋をしている
表紙：スコラブ
Twitter：@nantaruhoshi
Mail：nantaruhoshi@excite.co.jp

執筆者

迂回 ([@ukaian](#))

はだし ([@sunsetsan0](#))

ナイス書 ([@NiceGuuuy](#))

恋をしている ([@vayoikenumai](#))

スコラブ ([@scope_scape](#))

米田一央 ([@sawayakanai](#))

加賀田優子 ([@0ccak](#))

伊舎堂 仁 ([@hito_genom](#))